

今月の1冊から 2016年10月～12月 10月『鹿踊りのはじまり』

宮沢 賢治//作 たかし たかこ//絵 偕成社



嘉十（かじゅう）が湯治（とうじ）に出かける途中（とちゅう）のすすきの原に、うっかり忘れた手拭い（てぬぐい）。急いで戻ってみると、手拭いのまわりには6匹の鹿（しか）たちが。鹿たちは、びくびくしながら近づいたり、あわてて逃げたり。手拭いが安全（あんぜん）だとわかると、今度（こんど）は歌ったり、踊ったり。その姿をみていた嘉十も鹿たちの輪に入ろうとしますが・・・鹿踊り（ししおどり）は、宮沢賢治（みやざわけんじ）のふるさと岩手県（いわてけん）花巻市（はなまきし）の郷土芸能（きょうどげいのう）です。鹿たちの姿が美しく、躍動感（やくどうかん）あふれる一冊です。



11月『庭師の娘』

ジークリート・ラウベ//文 若松 宣子//やく 中村 悦子//え 岩波書店



1798年、女帝マリア・テレジアが治めていたオーストリアの首都ウイーンでのお話。

主人公のマリーは、修道院で看護の仕事をするのを父親から決められていた。マリーの父は、医者であるフランツ・アントン・メスメル博士のお屋敷の庭師で、マリーは庭に咲く薬草や草花が大好きで父のような庭師になりたいと思っていた。この時代、女性の庭師はなく、女性は自分で職業を決めることもできなかった。そして、そのメスメル博士の屋敷には12歳のモーツァルトがいて、演奏や作曲をしていた。モーツァルトはあふれる才能で作曲をするが世間では幼い作曲家への理解は難しかった。そんな中メスメル博士夫妻は、マリーやモーツァルトにやさしく手をさしのべるのだった。女性であることや若い作曲家であることをのりこえ、好きな事や自分が信じる道をすすむ二人・・・。物語の中のモーツァルトとは、みんながよく知っている作曲家のモーツァルトです。生誕260年を迎える今年、幼いモーツァルトが登場するこのお話を楽しんでみてはいかがでしょうか。



12月『ひとりぼっちのちいさなエルフ』

ハンヌ・タイナ//え インケリ・カルヴォネン//ぶん つのふえだん//やく 新教出版社



ちいさなエルフはちいさないえにたったひとりですんでいました。いえのとなりにはおおきなこだちがあり、いつもエルフをそっとみまもってくれていました。ふゆになり、クリスマスがちかぶくと、エルフはおきゃくさんをよんで、いっしょにおいわいしようとかんがえます。でも、どうやったらおきゃくさんはきてくれるでしょう？ こだちのしたでうたをうたってみたり、クッキーやケーキをつくらうとしましたがなかなかうまくいきません。さいごにエルフはろうそくづくりをおもいつきます。こんどこそおきゃくさんはきてくれるのでしょうか・・・北欧の国（ほくおうのくに）フィンランドからやってきた、クリスマスをおいわいするあたたかなきもちがこめられたおはなしです。